

現在の学校生活

吉本, 圭一
東京大学大学院

<https://hdl.handle.net/2324/18641>

出版情報 : モノグラフ・高校生. (8), pp.19-27, 1983-03-01. 福武書店
バージョン :
権利関係 :

第Ⅲ章 現在の学校生活



私たちの基本的なねらいは、既に述べたように職業科高校生の生活をありのままにとらえたいということだった。彼らが職業科で教育を受けているという事実注目した固有の視点が必要なのである。

そこで本章では、

1. 高校生活の充実度
2. 中学生活と比べて
3. もし普通科に行っていたら
4. 職業資格の取得をめぐる

以上、4つの節に分けて論じることにするが、ことに4つめの節では職業科の特色を直接対象として分析する。

職業科をありのままに見ようという私たちの基本的なねらいは、従来の高校研究に対する反省の面を含んでいる。つまりこれまで職業科高校生を、単に普通科に行けず進学競争から脱落したという視点からばかり眺めていたのではないか。そうした視点は半面の真理ではあるかもしれないが、職業科の生徒たちが、職業的価値観や職業意識を形成していくという視点にも注目すべきだろう。

本章で扱う基本的な仮説は具体的には次のようなものである。職業科の高校生たちが、自分の現在の生活を中学校時代や、もし普通科に進学していたと仮定した場合と比べてみると、彼らの職業科の中での生活はこれまで指摘されたような悲観的なものばかりでは決してないだろう。

ではどうしてそうなるのか。そのメカニズムは複雑だが、簡単に言えば私たちは3つのプロセスに注目する。それは第1に職業科教育の生徒に対する適合性、第2に受験生活からの解放、第3が指導的役割の経験である。

まず、第1のプロセスとして、職業科の教育が生徒たちに適合している故に、彼らがより充実した高校生活を送れるという可能性がある。職業の専門科目は役に立つだろうし、興味に合うだろう、また理解も難しくはないだろう。こうした点から職業科教育の適合性を考えることができる。

第2には、第1とかかわっているが、進学のための空しい受験生活からの解放という側面も見落とせないだろう。受験生活からの解放は、直接に、受験のためにほかの貴重な時間がけずられずにすむことである。また学校内で成績による人物評価の原理が薄れていく可能性がある。そのことをとおして、間接的にも解放される。受験がないことで、直接・間接に、仲間との新たな交渉が展開されていくことになる。また就職を目前にしていることともあわせて、おとなへの成長や成熟のための契機が提供されるのである。受験からの解放が生徒の成長の機会となりうるのではないだろうか。

第3には、指導的役割を経験するということの効果である。つまり、成績が上位になることや、クラスで仲間を引っばって活動するようになることが、生徒たちの自信や誇りを育てはぐくんでいくというプロセスが考えられる。その立論の背景として、前章で述べたように、職業科に入学する生徒の中学校時代の成績は全体として上位の者はさして多くはない。中学での“輪切り”の進路指導のためなのだが、そのため、職業科には同じぐらいの学力の生徒が集まり、どの生徒も上位の成績のとれる可能性がある。そのように上位の立場に置かれ、他の仲間を引っばっていく経験が増えることによって、自信が生まれ、自分や仲間や学校に対して誇りを持つようになるのではあるまいか。この点は、成績だけでなく、クラス、クラブ・部活動、生徒会のいろいろな活動に言えることだろう。

以上のように職業科の中で、高校生たちが充実した生活を送り、誇りを持って成長していく、その3つのプロセスを仮説として示した。このプロセスがあわさって、彼らは自分の職業観や進路意識を形成していくと考えられる。しかし逆に3つめのプロセスを注意してみれば、やはり職業科高校の現状の問題点もまた浮かび上がってくる。つまり学校の内での相対的な上位という位置に置かれることが生徒たちによい影響を与える可能性もあるが、“輪切り”の指導によって職業科に入学してくる生徒たちは、成績・学力でいうならば、高校生全体の中では上位の位置にあるわけではない。職業科という学科そのものに対する社会の見方は前に述べたように必ずしも好意的ではない。その見方によって、職業科の高校生たちが意気消沈するというプロセスも生じうるのである。いずれの仮説が妥当なのか、データを見ていくことにしよう。

1. 高校生活の充実度

(1) 学校生活全体の楽しさ

高校生活の充実度を知るための手がかりとして、まず現在の学校生活は全体として楽しいかを尋ねた。表Ⅲ—1によれば、「とても楽しい」という者は16%、それに「まあ楽しい」という者を加えても、49%であり半数に満たない。

この数値自体は、私たちのサンプルに固有のものであり、職業科全体をこれで判断するわけにはいかない。ただし、どのように楽しさ(つまらなさ)を分けていくプロセスがあるのか、その点は、基礎属性によって推察できる。なお私たちが分析した基礎属性は、性・学科・学年・成績(自己評価)の4つである。

そのクロス集計で見ると性・学科・学年と

もに顕著な差異はない。しかし、成績の場合には、かなり顕著な差があり、成績が上位の生徒では、学校生活が「楽しい」と答える者は52%いるのに対して、下位の生徒では42%となっている。それは、冒頭で述べた仮説から見れば、あまり「都合のよくない」結果となっている。つまり、職業科では「受験からの解放」があり、さらに学校内での成績中心原理が崩壊し、それが、生徒の成長のための有効な土壌を形成しているという第2のプロセスに留保が必要になってくる。職業科で成績中心の原理が崩壊していると言っても、それは程度の差というべきで、成績が上位の生徒ほど学校生活を楽しんでいる者が多いという原理そのものが消滅しているというわけではない。

表Ⅲ—1 現在の学校生活の楽しさ

(%)

		とても楽しい	まあ楽しい	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない
全 体		15.9	32.8	40.9	10.2
性 別	男 子	15.4	31.2	41.2	12.0
	女 子	15.9	32.8	40.9	10.2
学 科	工 業	16.2	34.1	39.5	10.0
	商 業	15.5	34.7	40.7	8.9
	園芸・農業	16.2	27.5	43.1	12.9
学 年	1 年	20.1	34.8	36.5	8.4
	2 年	11.5	29.7	46.6	12.0
	3 年	16.1	33.9	39.6	10.2
成 績	上 位	17.5	34.7	40.2	7.4
	中 位	16.8	36.2	39.5	7.2
	下 位	13.9	27.9	42.8	15.3

注) 無回答・不明は省略した

(2) 学校生活の諸領域の充実度

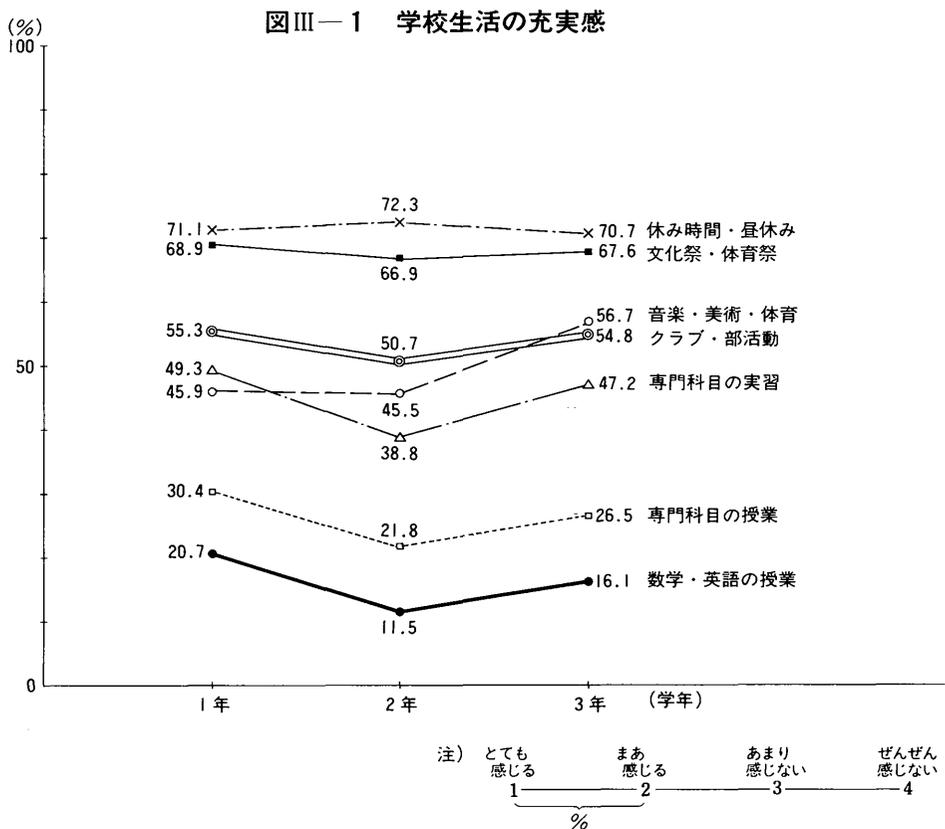
学校生活全体の楽しさというものは、ある領域の充実感や楽しさをとおして生じてくるものであると考えられる。そこで各領域ごとの充実感を示したものが図Ⅲ-1である。これを見ると、学校生活の各領域のうち、はりあいや楽しさを感じる割合の高さから3つのグループに分けられる。つまり、数学・英語の授業と専門科目の授業が第1のグループ、音楽・美術・体育、クラブ・部活動、そして専門科目の実習が第2のグループ、休み時間・昼休みと文化祭・体育祭が第3のグループとなる。言い換えれば、第1のグループは椅子に座って講義を受ける勉強、第2のグループは体を動かす勉強、第3のグループは勉強とは関係ないものである。

重要な点として、この図で比較する限り、職業に関する専門科目が生徒の意識の中で、

独自の位置づけを持っているとは言えないということが指摘できる。専門科目の実習と授業との両者間で、充実感を感じるかどうかにかつ約20%の差がある。そして、専門科目の授業と実習に充実感を感じる生徒は、1年から2年にかけて急減し、3年になると実習は1年生の時の比率とほぼ同じぐらいにまで戻るが、講義の楽しさはあまり回復していない。

仲間との親しい交流の持てる休み時間・昼休み、文化祭・体育祭の時間にはりあいや楽しさを感じる生徒は約7割であり、学校生活の充実感や楽しさの源は、友人ということになろう。逆に、講義を受ける勉強に対して、はりあいや楽しさを感じている生徒はわずかに3割である。

なお、学科ごとに見ると専門科目の授業や実習についての充実感には大きな差がある(巻末集計表参照)。



(3)仲間・教師・校則

学校生活をより詳細に聞いた設問の結果を見ると(表Ⅲ—2)、クラスの仲間に親しみを感じている者は全体の87%、先生に対して親しみを感じている者はその半分の41%となっている。逆に先生から無視されていると思っている者は、34%いる。

この点を成績別に見ると、友人関係については成績による差はないが、先生との関係では大きな違いがある。成績が上位の生徒では50%が「先生に親しみを感じる」と答えるが、下位の生徒では、34%にすぎない。また逆に、「先生に無視されている」という回答は、成績が上位の生徒では31%だが下位では41%になっている。

校則についての意識では、57%の者が「校則を守らないことがある」と回答しており、また「校則にしばられていると感じることがある」と答える者が61%いる。そしてこれを

成績別に見ると、上位の生徒は校則にしばられていると思う者が68%と多く、逆に下位の生徒では校則を守らないことがあるという者が63%にのぼる。つまり、成績が上位の生徒は束縛感を強く意識しているが、下位の生徒には束縛感はさほどでなく、現実的に校則違反をするという行動レベルで反抗を示している。その意味では、校則に対する拒絶意識は成績の上位・下位を問わず共通して持っているのである。

以上のように、職業科高校生の学校生活をありのままに見ようとすれば、まず第1の知見は、職業科高校といっても普通科高校と全く別種の存在というわけではない、むしろその両者の内部のプロセスは共通しているという点である。進学のための受験教育という面からは解放されているとしても、それによって成績が生徒のフォーマルな地位にかかわり、それ故に学校生活の楽しさや充実度が規定されるというプロセスは消滅しないのである。

表Ⅲ—2 仲間・教師・校則についての意識

(%)

	全 体	成 績 (自己評価)		
		上 位	中 位	下 位
クラスの仲間に親しみを感じる	86.7	88.2	88.9	83.2
先生に親しみを感ずること	41.3	49.7	42.6	34.3
先生に無視されていると感じる	34.0	30.5	29.7	41.0
校則にしばられていると感じる	61.4	67.8	61.2	63.9
校則を守らないこと	56.8	50.7	55.6	62.5

注) よくある 1、たまにある 2、ほとんどない 3、ぜんぜんない 4
%

2. 中学校生活と比べて

(1) 学校生活の変化

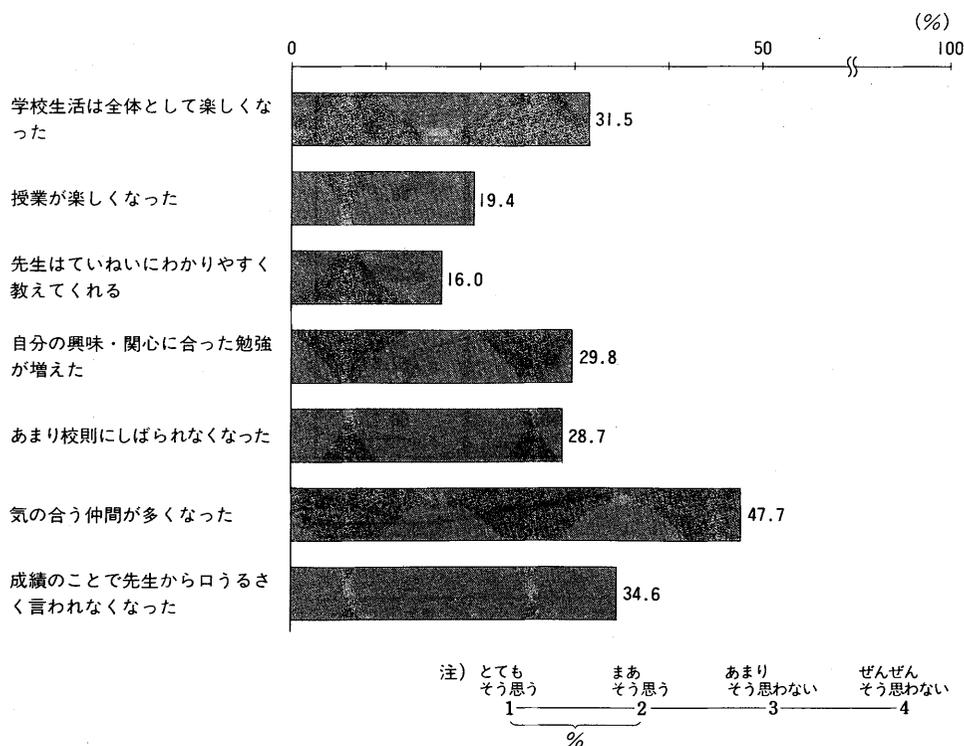
第II章で中学生活についての分析をしたが、6割の生徒が「自分は勉強に向いていないと感じたこと」が、「よくあった」あるいは「時々あった」と答えていた。こうした入学者を高校側がどのように処遇しているのか。また中2の時点では4割が普通科の高校に行きたかったと答えている。進路変更を余儀なくされて入学してきた生徒たちをどうするのか。現在の選抜制度を前提とするのならば、この入学者全体に対する対応の仕方こそが、職業教育の評価・診断や改革のキーになるはずである。

図III-2は今の生活を中学時代と比べてどう変わったかを尋ねたものである。いちばん

変わったものは「気の合う仲間が多くなった」という項目で、48%の者が「とてもそう思う」あるいは「かなりそう思う」と答えている。以下、「成績のことで先生から口うるさく言われなくなった」が35%、「学校生活は全体として楽しくなった」は32%、「自分の興味・関心に合った勉強が増えた」30%、「あまり校則にしばられなくなった」29%、など、各項目ともに3割前後の生徒にとって、学校生活が肯定的な方向に変化したのだと言える。

「授業が楽しくなった」とか「先生はていねいにわかりやすく教えてくれる」という授業理解にかかわる面では、学校側が十分生徒に対応できているわけではなく、そのように変わったと思う生徒は、いずれも2割程度でしかない。しかし、8割の生徒に対しては「授

図III-2 高校生活と中学生活の差



業の楽しさ」を伝えることができないでいるとしても、2割の生徒の授業への姿勢を変えさせたということは、直接職業科高校での教育の効果とも考えられる。

ではどの学科でそうした変化が著しいのだろうか。図Ⅲ—3を見ると、それには2つのパタンがあることがわかる。1つめは、図の上のグラフに示したように園芸・農業科でいちばん変化が大きいものである。「先生ははいねいにわかりやすく教えてくれる」と思う者は、商業科ではわずか11%にすぎないのに、園芸・農業科では25%、4人に1人がそう思っているのである。工業科はその中間の値である。グラフは省略してあるがこのパタンに入る項目としては、「成績のことで先生から口うるさく言われなくなった」(園芸・農業科=41%、工業科=36%、商業科=30%)がある。また「授業が楽しくなった」という者も園芸・農業科では26%いる。

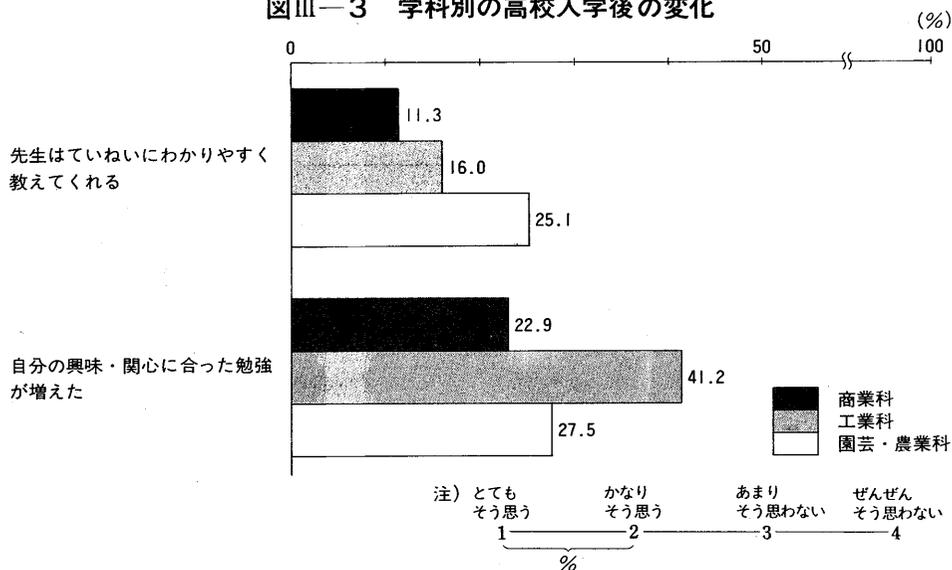
2つめのパタンは図Ⅲ—3の下のグラフに示されたもので、工業科に変化が著しい。「自分の興味・関心に合った勉強が増えた」と思う者は工業科で特に多く、41%がそう思うのである。同じく「あまり校則にしばられなくなった」という項目でも工業科で39%、他が25%前後となっている。

少しこの変化を考えてみると、工業科の場

合で言えば、他の学科と比べて、早くから職業科へ入学しようと考えていたのだろうか、また「自分の向き・不向き」を重視して志願してきた比率が大きいからではないだろうか。つまり、商業科や園芸・農業科と比べて専門志向が強い生徒が入学してくるため、職業科目に意欲を持って取り組めるのだろう。なお校則の問題は、今回の調査の対象とした工業科校が偶然校則の厳しくない学校ばかりだったのか、それとも何らかの必然性があるのか、ここでは解明できない。

次に園芸・農業科の事情を考えてみよう。この学科に入学している生徒の6割は、中学校時代の成績が下位から10番までの内にいた。中学校時代彼らは授業の中ではいわゆる“お客さん”だったのではなかろうか。しかし彼らも受験しなければならぬ。受験に際して先生から成績のことで絶えず口うるさく言われる、そうした中学校時代だったのかもしれない。では、高校進学後はどうなのか。高校では彼らの学力に合わせて授業がすすめられ、少しずつだが「授業が楽しく」なっているのかもしれない。今回の対象で言えば、3学科中でもっとも中学校時代の成績が低い園芸・農業科において、いちばんその効果が明白に表れているのではないだろうか。

図Ⅲ—3 学科別の高校入学後の変化



(2) 学校生活変化の規定要因

高校生になって中学校の頃よりも「学校生活が全体として楽しくなった」という者は32%を占める。少なくとも3分の1近い生徒にとって、職業科への進学は中学校時代よりも楽しい学校生活を送れる条件となったのである。それでは、いったい何がこのような変化を生んだのだろうか。学校生活を楽しくさせた規定要因について分析を進めていくことにしよう。

表Ⅲ—3を見てみよう。まず、高校受験との関連を見ると、「今の学校をはじめから希望していた」者ほど、中学校時代より今の学校生活の方が楽しくなったと答えている。また高校選択に際し、「自分の向き・不向き(適性)」を重視していた生徒は、重視しなかった者よりも、学校生活が楽しくなったと感じている。つまり、高校受験において、自分の志望と適性になかった高校選択をした者ほど、中学校時代より高校に入ってから学校生活

の方が楽しいと評価しているのである。これは別の角度から見れば、職業科の教育が、生徒の志望や適性に適合している場合には、普通教育中心の中学校に比べ、より充実した高校生活を生徒に提供できることを示唆している。

次に、職業科の特徴である、職業専門科目について見ると、専門科目を「半分以上わかっている」者は、「あまりわからない」者に比べ、学校生活が楽しくなったと答えている。また、専門科目の勉強と深くかかわっている「資格取得のための勉強」について見ると、「資格を取るために一生懸命勉強した(している)」者ほど、「楽しくなった」という回答が多い。これらの結果から考えて、職業科独自の教育をうまくこなし、専門科目の勉強に強い動機づけを持った生徒たちが、現在の高校生活を中学校時代に比べ、より楽しく感じているとみることができる。ここでも、職業科の教育が生徒に適合していることが、生徒の学校生活を変える要因になっているのである。

表Ⅲ—3 学校生活の楽しさの変化を規定する要因

(%)

楽しさの規定要因		な楽 つし たく	なそ いう で
高校 受験	はじめから今の学校を希望していた	35.9 ▽	64.1
	他の学校を希望していた	29.7	70.3
	どこでもよいと思った	27.2 ▽	72.8
	本当は高校には行きたくなかった	20.0	80.0
高校 受験 の 決 め 手	自分の向き・不向き(適性)が重要だった	36.3 ▽	63.7
	自分の向き・不向き(適性)は重要ではなかった	26.1	73.9
専 門 科 目 の 授 業	半分以上わかっている	35.7 ▽	64.3
	あまりわからない	26.1	73.9
資 格	資格を取るために一生懸命勉強した(している)	34.8 ▽	65.2
	資格を取るために一生懸命勉強していない	26.8	73.2
現 在 の 成 績	上 位	35.7	64.3
	中 位	33.8 ▽	66.2
	下 位	26.6	73.4
指 導 者 の 経 験	クラス、クラブ・部活動、生徒会でみんなの先に立って活動することがある	41.9 ▽	58.1
	クラス、クラブ・部活動、生徒会でみんなの先に立って活動することがない	28.8	71.2

このように、中学校にはなかった職業専門教育を提供することは、それが生徒の志望や適性、学力や動機づけにうまく適合する場合には、普通教育だけでは達成できない生徒の変化を導き出すことができる。しかし、この結果を逆に見れば、職業科の教育が生徒に適合しない場合には、十分な成果が得られないということでもある。その意味で生徒の志望・適性・学力に応じた高校進学への指導が可能か否かが、職業科の教育の成功の鍵であると言えよう。

それでは、高校での新たな成功経験や指導者経験の有無との関係はどうだろうか。成績の上・中位者は下位者に比べ、そして、「クラス、クラブ・部活動、生徒会でみんなの先に立って活動すること」がある者はない者に比べ、中学校の頃より「学校生活が楽しかった」という回答が多いのである。

これを中学校時代の経験との関連で示したのが、図III-4である。まず中学校時代に成

績下位者であった生徒の現在の成績と、学校生活の楽しさの変化との関連を見ると、成績上位者ほど、中学校の頃より学校生活がより楽しくなったと答える者が多い。学業面での新たな成功経験が、学校生活を変えているのである。

また、図III-4で、中学校時代に指導者としての経験がなかった者のうち、高校に入ってから指導者経験を持つようになったかどうかと、学校生活の楽しさの変化の関連を見ると、中学校時代には指導者としての経験がなかった者でも、高校入学以後、そのような経験を持つようになった場合には、中学校時代より現在の高校生活の方が楽しくなったと答えているのである。

このように、高校進学の結果、中学校では体験できなかった成功経験や指導者としての経験を持つことによって、学校生活にポジティブな変化が生じうるのである。

図III-4 中学校と比べて高校生活が楽しくなったと思う者の割合

